慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ポル・ヅムトール「ロマン期の詩の言語と詩法」
Sub Title	Langue et techniques poétiques à l'époque romane (XIe-XIIIe siècles), by Paul Zumthor
Author	松原, 秀一(Matsubara, Hideichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1966
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.22, (1966. 11) ,p.23- 26
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00220001-0023

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

ポル・ヅムトール「ロマン期の詩の言語と詩法」

Paul Zumthor : Langue et techniques poétiques à l'époque romane (XIe—XIIIe Siècles)

松原秀一

著者ヅムトール氏はアムステルダム大学のロマンス語学文学の教授で、その仏・独の諸研究誌に発表する中世文学における修辞法の諸論究は広く学界の注目を蒐めているが、ここに取り上げる著書は、氏の諸研究を方向づける基礎理論と云えるものである。

フランス中世文学研究は一九三八年のベディエの死の頃より新らしい局面を展開し出したと云え、戦後の研究の発展には目覚ましいものがある。十九世紀の中世発見より始まるロマン派的な文学民衆起源論、「プリミティフ」的中世人の観念がベディエ、ジャンロワ、近くはG・コーアン等によって否定され、中世作家の独創性及至は個性の認識がおこると、同時に十九世紀までは中世文学の主流とされて来たラテン語による作家を、むしろ歴史家の手に委ねた感があり、フランスでは俗語文学とラテン語文学を互いに異質な平行する文学と捉えさせる結果となった。この顕著な表われを我々はアノトーの「フランス史」第十二巻の「文学史」がピカヴェのラテン語文学史とベディエ・ジャンロワの俗語文学史とを併置していることに見ることが出来る。もちろんラテン語文学又はラテン文学の俗語文学への影響は常に認められて中世ラテン文学史もマニティウス、ピカヴェ、ゲリンク等すぐれた労作が書かれて来たが、この二者は別個に取扱い得るものとされて来た。従って今世紀に入ってのイタロ・シチリアーノ、E・ファラル等によるラテン語による中世文学の役割りの重視も俗語文学へのラテン語文学の働らきかけを捉える面からの再評価と云える。ラテン語による文学も俗語文学も同質の活

動として捉えることは今次大戦中のクルティウスの労作「ヨーロッパ文学と中世ラテン世界」Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter が初めて大規模に行ったと云へよう。

ヅムトール氏は一九五四年に出版した優れた「中世フランス文学史」Histoire littéraire de la France Médiévale によって、ラテン語による文学も俗語による文学と等しく中世フランス la France médiévale の文学活動として捉えることを試み、文学を上部構造として、それの生れた社会の変遷の中に位置づける立場を貫ぬいた。これはヅムトール氏が早くからW・フォン・ワルトブルクの構造主義的な史的言語理論の立場に立って社会史的なフランス語の発展の問題に（Wörter und Sachen）通じている事を考え合わせる可きであり、ヅムトール氏はこの領域に於ても現在刊行中のワルトブルク氏のフランス語語源辞典（FEW）に約二百五十項目を執筆している他、多くの論究がある。（"à propos du mot "Génie" Zeitsch. f. r. Phil. LXVI. "Le couple fr. Rime-Rythme, Travaux de ling. et de litt. Ⅲ, 1, "Etymologie" *in* Etymologica, Festschrift W. V. Wartburg, etc.）

このようなヅムトール氏の単語の意味領域の史的変化への関心は当然、作品研究に於ては作家の語・語法の選択、即ち文体の問題に向けられ、文体を厳密な史的条件の枠との関連に於て考え、中世の詩の言語の位置を定める努力として表われる。既に一九六〇年に Revue des Sciences humaines 誌に発表した論文 Document et monument で定義された中世に於ける Monument, 構成を意識し受容者の立場を考慮した言表の問題が再び取上げられ、中世の詩語が本質的に等質集団内の所謂「通」（コネスール）間の言語、結社員間の言語であって、そこに求められているのは感興を高度の技法によって不易な形に結晶させること、即ちモニュマン化であった事を指摘している。ダンテが俗語をして不易文学の域に達せしめる（volgare illustre）と云うのも俗語をモニュマン化の技法に耐えさせ時間、空間の羈絆を脱せしめる技法の探求であった。

詩人に求められたのは詩人自身の体験の告白でも内心の直接の発露でもなく、既に詩人以前に撰ばれた語句を組合せて、既に伝承によって定められているフィクティヴな場面の一つを借り、一つの純粋な「調和」の世界を創り出す技術であった。ヅムトール氏は詩につかわれる語句が既に選択されたものである事を重視し、これを鍵盤に譬へ、詩人の即興もこの鍵盤操作であるとし、この技法として

の詩的世界の統一が破れるのを十三世紀のロマンの出現によるとする。ロマンは詩の形で書かれても「歌うこと」よりも「告白」を目する点で以上のべた不易性を目さず、従って改作され、次いで散文に発展して行く。十三世紀に書かれたプロヴァンス詩人の「伝記」が作品の内に詩人の告白を見て構成された事はヅムトール氏によれば典型的にこの転回を象徴するとされる。

このヅムトール氏の「鍵盤」と云う考へ方は従来、武勲詩の延長上にロマンを捉へ、抒情詩のプロヴァンスからの北上をそれに平行すると考へて来た文学史理解上の定型に対して、一方に鍵盤を持つものとして聖者伝（聖レオデガリウス伝、クレルモンのキリスト受難記、聖アレクシウス伝等）武勲詩、抒情詩を、他方に鍵盤を持たず「歌うこと」よりも「告白」に傾むく「小説」を対置する事となり、最近の諸学者が内容上ロマンを「歴史」の延長上におき、聖者伝の延長上に「武勲詩」を置き対比する傾向と一致している。

「鍵盤」は言語を日用の次元からモニュマンの言語に転回させる技法の一つであるがヅムトール氏はこの転回の技法を三つ数える。第一は「旋律による転回」でモニュマンは歌われ、歌われぬ日常の言語と対比される。第二は「韻律による転回」でモニュマンは日常の言語の持たぬ律動を持つ。第三は「修辞法による転回」で古語法雅語や云い廻しによってモニュマンの言語は日常のと異なる。モニュマンはこのどれかによって成立するが、この三つの転回法をあわせ持つのは抒情詩と武勲詩であり、この三つをあわせ持つものをヅムトール氏は「ロマン期の詩」と呼び、パストウレル、アダン・ドゥ・ラ・アルの詩、ジョフレ・ド・リュデルの詩等の分析によって「修辞法による転回」の細かい技法の問題を追求し伝統的に詩に使われる語句にいくつかのグループがあることを注意している。例えば春のテーマには小鳥が出て来るが、そこに典型的なのは dous tens, mai, avril, rossignol, chanter, proier であり、これの変型 tens, esté, chant, oisel, であり、愛を求めるテーマでは merci, pitié, essaucier, proier 等で語法も限定される。ここでは fine amour, douce dame, loiaux と云った一連の語句が使われる。もし田園風愛であると Garins m'a... conrtoise, gentil, senz orgueil と云うような語群となる。このテーマによる用語群の違いをヅムトール氏はパイプオルガン奏法上の「ストップ」操作に譬える。

この三つの「転回」と「音栓」の観念は（私見であるが国文学にも有効と思われる）フランス中世文学でも最近大きな問題とされる「ストラスブールの誓い」「聖女エウラリア」「キリスト受難」「スポンスス」等の中のラテン語語彙の存在の問題、又、俗語とラテン

語を混用する「カルミナ」「バルバロレクシス」の問題、レンボ・ドゥ・ヴァケイラスの六ケ国語による Descort の問題等に新しい光を投げると共にロマン等における諸方言の混在を技法の面から見る一つの示唆を与へるものである。

この修辞法の分析は、多くの作品について行なわれ、南仏から北上する抒情詩に北仏がラテン文学にはない修辞法上の改革を行った事を明らかにし、ロマン期の詩法が語彙の上から見るとかなり限られたものである事を明らかにした。ワースの語彙は五千、クレチャンは六千と云われるが道具語を除いた実体詞は極めて少なく抒情詩では二、三百語と云う。脚韻に用いられる語の数が限られていることは従前からしられているが、これはロマン期の詩が用語の豊富さ、体験の分析を目ざさず、嘗つてロベール・ギェット氏が Revue des Sciences humaines 1949 で云ったように「その価値は伝統によって既に撰ばれたと云える語からではなく、その語の用い方、重さ、とその位置から定まる」形式、調和を目しているからであり、腕の冴えを求めたからである。その点、詩は四学科(クワドリヴィウム)の音楽、数学に通じるものと云えよう。

ヅムトール氏のこの著は中世文学の新しい解釈法への基礎的立場の表明であって、細部に問題を多く含んでいる。「ヴィダ」の問題に見られるように反論を許す点もあろうし、ロマンを鍵盤のないものと捉えるのも、ビザンティン風ロマンス、又、エネアス物語について同様に論じられるかどうか問題であり、抒情詩をその旋律を切捨てて論じ得るかどうかも問題であらう。しかし、ドラゴネッティ、クレモネージ、ケーラー等の多くの論究と共に中世修辞法について新らしき局面を拓き、失なわれた感性について我々に視野を与える論究の一つであることは疑いを容れない。この書の中で多くの作品の構造が明らかにされ、新しい解釈の可能性が多く示されている点での寄与も大である。今後、中世文学研究上、必らず参照すべき書となるものと思われる。

Paul Zumthor : *Langue et techniques poétiques à l'époque romane* (*XIe—XIIIe siècles*) 224 pp. Paris, C. Klincksieck 1963